

# エゾノハシ



*Capree.*

## 2014 冬季号 107

北海道ボランティア・レンジャー協議会

# 目 次

2014, 1 28 発行 107号

- ・まだ見ぬものリスト 副会長 五十嵐 一夫
  
- 1 自然観察会などから
  - ・晩秋の森の観察会に参加して 札幌市 植木 玲子
  - ・北大での「白夜の北極・グリーンランド展」を見学して  
…温暖化はどうなっているのか… 広報部
- 2 育成研修会から
  - ・2013 ボランティア・レンジャー育成研修会に参加を終えて 札幌市 宮越 洋子
  - ・育成研修会の成果と反省 参加者アンケートから (交流館)、我々の反省 役員会
- 3 第3回役員会 (1月24日) の報告
- 4 住所変更など
- 5 写真特集 H25年 研修会ダイジェスト<様似、鶴川、道北、オホーツク>  
<松井玲子さんが作成>
- 6 研究、研修での発表などから
  - ・都市公園について 江別市 土屋 忠司
  - ・歌の中に生きる花 オオマツヨイグサ 平取町 川村 桂介
  - ・昆虫の冬越し 恵庭市 小林 英世
- 7 連載
  - ・野幌森林公園に行く 苫小牧 谷口勇五郎
- 8 支部活動、個人活動の紹介
  - ・オホーツク支部 機関誌<流氷>から
  - ・田村さんの見事な力作バードカービングとスケッチ展 広報部
- 9 自然観察NOWから  
NO7 昨年度のNO9号
- 10 事務局便り

<編集後記>

## まだ見ぬぬものリスト

副会長 五十嵐一夫

私の住んでいる当別町には、北海道医療大学という医療系の総合大学がある。薬学部の堀田先生とは、もう10年以上の付き合いになるが、ここ数年は彼の植物調査に同行することが多くなり、おかげで随分と勉強をさせていただいている。

去年は8月下旬に歴舟川支流の河原で、日高の固有種のエゾトウウチソウを始めて見る事ができた。残念ながら土砂降りの雨で時期が少し遅く、花の盛りは過ぎていた。今年もう一度写真を撮りに行きたいと考えている。

7月下旬には、美深町の松山湿原ですごいものを見た。美深町は、平成6年に第15回ボランティアレンジャー育成研修会の講師として訪れた懐かしい町で研修会の役目が終わった後に松山湿原を訪れたが、実に19年ぶりの再訪となった。すごいものとはタチギボウシの一斉開花で、この情報は堀田先生から頂いた。春先から何度も松山湿原に入り、今年のタチギボウシは大ブレイクするという情報を1週間前に入手し、登山口から30分の山登りで松山湿原についた。25haの湿原全体が紫色に染まっていた。平成16年にも同じ現象があったが、湿原のごく一部分でのことであり、9年ぶりとなる昨年の開花は、湿原すべてでタチギボウシが咲き乱れていた。一昨年は数株しか開花株がなかったそうで、もともと厳しい環境なので、条件がそろいエネルギーを蓄えられるまで待っているのだろうか。自然の不思議さを改めて思い知らされた。

平成3年の第10回育成研修会を受講し、翌年にボラレンに入会させていただき自然観察や自然解説にかかわるようになった。今年で22年目になるが未だ知らないことが多々ある。エゾトウウチソウは十勝に行けば必ず会えるが、松山湿原の紫色のじゅうたんは何年後に出現するだろうか。まだ見ぬ花がたくさんある。まだ見ぬ鳥もたくさんいる。数年後には定年退職となる。好き勝手に道内を走り回り、まだ見ぬリストを一つづつつぶしていくことを夢見て、雪と格闘しながら春を待ち望んでいる。

## 晩秋の森の観察会に参加して

植木玲子

夜来の雨が止んだ11月3日の日曜日、観察会に参加させていただきました。

数年前から野幌森林公園へ足を運び、春、夏、初秋、植物観察とウォーキングを楽しんでいます。ふれあい交流館主催、春の植物観察会には2回参加、秋の観察会をはじめです。交流館で今回の行事を知り、カレンダーに書き込み、植物に詳しいガイドの方のお話しをととても楽しみにしていました。

エゾユズリハコース～志文別線～森林の家～もみじコース～中央線 8 km、もみじコースをはじめ、志文別線～森林の家コースは2回目です。

歩きなれたエゾユズリハコースからガイドの土屋恵司氏の説明を聞き漏らすまいとメモを取りながら、紅葉を愛で、落葉を踏みしめての観察は興味深く、やはり、詳しい説明を聞くと新鮮な驚き、発見もあって楽しいものでした。

あらためてメモを見ると花が終わり、実をつけている樹木、草花は特に目を惹きます。ホウチャクソウ、ユキザサ、マイズルソウ、ツルリンドウ、ルイヨウショウマ、コウライテンナンショウ、フッキソウ、キタコブシ、マユミ、コマユミ、ガマズミ、ツルシキミ、クサギ etc

ノリウツギ、ツルアジサイ、イワガラミなどの説明には花がととても似ているので開花の季節に思いを馳せ、今度こそはと思っています。

開拓の村では夏の間、カイコの飼育を行っています。同好会の先輩が飼育に携わり、いろいろ教えてくださいくださるのでとても勉強になっています。

今年はいよいよの成長、日を追って観察ができましたが、観察会ではウスタビガの繭を見せていただきました。触れるとしっかりしていて、きれいなうすい緑色です。ウスタビガの繭から自然界でのカイコはどのような状態なのかを考えました。繭は可愛らしい形状でした、幼虫、成虫は？

虫こぶのお話しも子供のころから不思議なこと、詳しい説明、中身を割って見せていただき虫の観察もできました。このような体験は観察会ならではの、とても嬉しいヒトコマでした。こぶの花も好きな一つ、きたこぶの花の実が枝にぶら下がり、白い花からは想像出来ない光沢のある赤い実、あのような形状とはじめて知りました。

もみじコースでは函館山ではじめて出会ったクサギに再び会えました。花、果実の愛らしさに似ず、葉をもむと独特の臭いがあるのですぐに覚えられました。臭木とは・・・。

山歩きを始めて、子供のころ身近で知りえなかった山野草の名前をずいぶん教えていただきました。名前を知ると愛着がわきます。山とは違って手軽に訪ねられ、動植物が多様な野幌森林公園は最高、残してくださった先人に感謝です。

四季折々の楽しみ、この度は晩秋のひとときをいろいろ興味深いお話しを聞きながら、格別でした。メモに書き記した樹木、草花、図鑑でおさらいをしています。野鳥に詳しい方との出会いもあり、冬も出かけたいのですが手軽には行きません。春を待つて、教えていただいたことを振り返りたいと思います。企画、運営をいただいたボランティア・レンジャー協議会のみなさま、お世話をお掛けしました。ありがとうございます。

《北大の博物館での「白夜の北極・グリーンランド展」その後の関連する講演会、  
「朝日新聞」記事などから》

## 北極でも温暖化が急ピッチで進んでいる 広報部

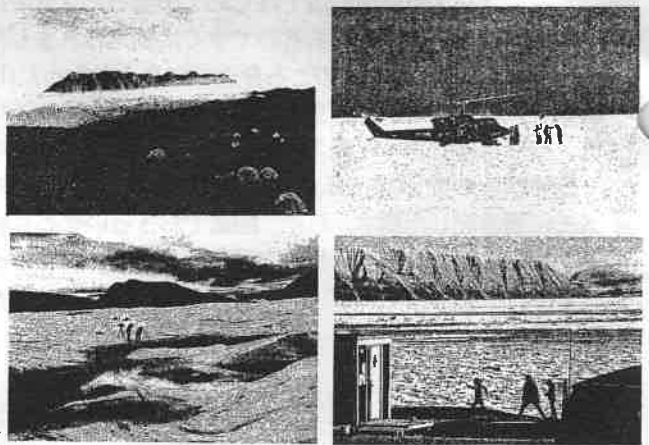
昨年秋、フィリピンのレイ島を襲った台風、津波によって多数の死者を出し、都市そのものが壊滅してしまった。フィリピン付近の海が暖かくなり、大気を大量に放出し続けたために起こった異常な気象によって恐ろしいほどの台風を引き起こした。日本でも、夏の異常な熱さ、台風による大雨、土砂災害などは伊豆大島をはじめとして各地に大きな被害をもたらした。

そうしたこともあって、地球の温暖化はどうなっているのか、それを知りたいと思って、11月中旬、北大の博物館での《白夜の北極・グリーンランド展》を見に行ってきた。

北大の低温科学研究所の若き研究者が昨年6月からグリーンランドの氷河・氷床を調査、研究しつづけてきた。そこでは、氷河の表面はザラザラした雪のようであり、川が流れ、微生物・クリオコナイトが太陽の光を受けて周りの氷を暖め溶かし青い穴をあけていた。温暖化は急速に進んでいるようだ。10年間で海水面が6mmも上昇していることがわかってきている。

もう少し調査、研究の様子を知りたいと思っていた。その後、朝日新聞、HTB、北大の研究者による講演会があって、聞きに行ってきた。この調査に同行したHTB報道記者金子陽さん、北大低温研的場澄人さん、写真家阿部幹雄さんが講演された。それらは新鮮で刺激的であった。その講演を聞いて、グリーンランドの温暖化の全体像、そこに住んでいる人たちの生活の様子などを含めて理解を深めることができた。続いて、南極観測隊として3回も行かれ、今回も同行した阿部さんの『朝日新聞』に掲載された記事からも多く学ぶことができた。

それらをもとに記してみる。まず、調査をされたグリーンランド、ここには約6万人が生活しているようである。今回の研究の拠点にもなった北緯77°にカナックという村がありカラーリット人が約600人生活している。北緯77°で冬は-30°にもなり、どうて人が生活をするのには不可能のようだが、南から暖流が熱をはこんでくれるお蔭である。高山植物も多く、氷河時代の生き残りと言われている



＜北大の博物館のパンフから＞

しているチョノスケがたくさん咲いている。—我々は大雪山でわずかに見るが—

近年の異変について、カラーリットの人たちはアザラシはこなくなり、冬でも雨が降るなどと語っていたようである。

北大の学術チームはこの村から約30km離れたくボートイン氷河>を調査する。

この氷河・氷床は溶けザクザクし、あちこちに青い池ができ、いくつもの川が流れていた。氷河は一日に1~2メートル移動し、かなり速いピッチのようである。その氷河の先端は、その大部分は海底に沈みこみ崩れ落ちていた。海面上に突出しているのは高さ30メートル位の断片で、その大部分は海底に沈んでいる。その厚さは約250メートルにもなっている。海水も暖かくなり海底に移動し沈んでいるこの氷河を溶かしている。

北大のこの研究グループは最近の科学機器を用いて氷河の厚さを測り、その結果250~300メートル位であることがわかった。今回の調査の大きな成果である。

この氷河で、温暖化をもたらしている要因の一つに黒色していた物質、微生物・クリオコナイトの働きがあるようである。あまり聞いたことがないので、この調査に同行し、これを顕微鏡写真で見た阿部幹雄さんが『朝日新聞』に書いているのを引用してみる。「光合成をするシアノバクテリアが糸状に絡み合い、内部に鉱物粒子を取り込んでいる。生物なので核酸(DNA)も見える。」

このシアノバクテリアは太陽の光を受けて光合成をして増殖し周囲を暖め青い穴を開け、その底に堆積しているそうである—内部に黒色の鉱物粒子を取り込んでいることも関連していると思われるのだが—。もともとクリオコナイト粒は氷のなかにあったが、それが溶け表面に露出してきたものである。

私は生物学の知識に疎い者だが、南のオーストラリアの周囲の浅い海の中で<シアノバクテリア>が光合成して酸素を地上に放出し、その結果、生物たちが生きていけるようになった。そうしたことの関連性で検討してみることも必要でないかと思う。どうだろうか。

北大の調査などは温暖化のメカニズムを解明していくうえで貴重な成果をあげた。この調査とは直接的には関係ないが、アラスカでは永久凍土のメタンハイロードからメタン生成菌が増殖しメタンガスが噴き始めているようである。このメタンガスはCO<sub>2</sub>の20倍もの力で温暖化をもたらすといわれている。

昨年9月、IPCC(気候変動に関する政府間のパネル)は、2100年には平均気温は4.8°アップし、海水面は82cm上昇するという予測を出している。太平洋の島々で生活する人たちどうなっていくのであろうか。日本でも砂浜の80%が消失するともいわれている。

地球温暖化に対して、私たちはどう取り組んでいけばよいのか、という緊急で切実な課題が突きつけられている。それをこれまで先延ばしをしてきた。

アメリカ、中国、日本などは大量のCO<sub>2</sub>を排出しているが、なんら有効な対策を打ち出していない。そればかりか経済成長のみを追求して、一層の自然破壊を続け、温暖化を加速させている。この温暖化と原発の再稼働がとても気にかかる今日である。(S)

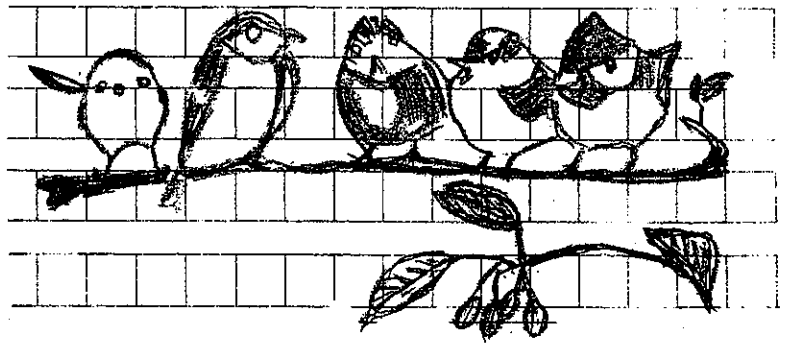
札幌市 宮越 洋子

あ、何と静謐に満ちた野幌の森だろう。世界3大都市公園にランクされているだけあって、その広大な面積と膨大な動植物の宝庫、毎年ほぼくるいなく巡り来る自然の営み。人々の生活もまたそれに順じつついつともなく様変わりして行く……。

一念発起 10月25日～27日の3日間、北海道ボラ・レン（略）が共催する研修会を受講する。場所は秋たけなわ、木々の紅葉が今まさに燃え出する如き野幌森林公園大沢口自然ふれあい交流館。

3日間、綿密なスケジュールをボラ・レンの会長、講師、会員、交流館スタッフ各位、ベルトコンベアに流されるようにごなし、ゆき届いた研修会の運営でお世話頂き感謝に絶えない。

また各講師陣、内容の深さと説明の上手（うま）さには素人集団であると謙遜する方々であるのにどうしてどうして、専門家も及ばぬある種のカルチャーショックを受け感心したものです。

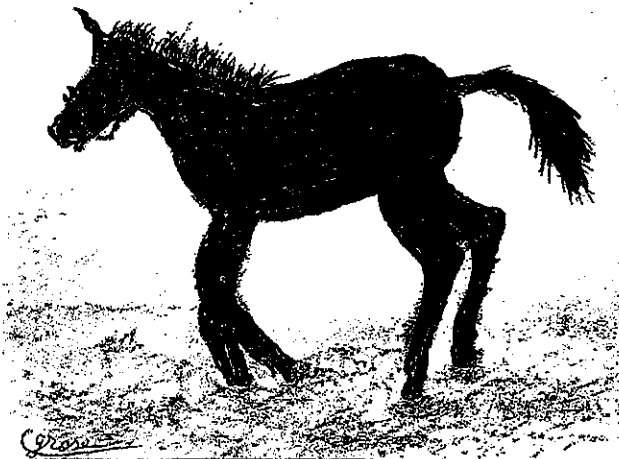


《自然は素敵！ 宮越さんのカット》

解散後ボラ・レン入会申し込みは云うまでもなかった。

春日会長のモットーとされている「自然の案内人」に一步步近づけてゆけたらと思い、東日本大震災以来、世界中の人々と心に刻んだ、“きずな”言葉をここでも身を持って体験した3日間。有り難く感謝の日を送らせて頂いております。

\*\* 今年の干支（えと）から \*\*



グロース・千鶴子さん... 画

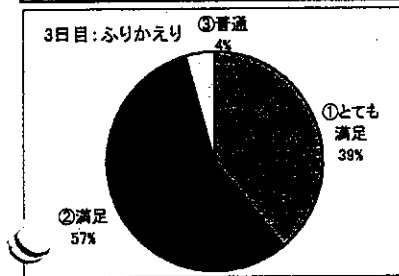
私達も元気に草原を走りまわりたい

＜参加者からのアンケートの集約＞－交流館の集約から

今回の育成研修会をととても評価されてくれて、嬉しく思う

【3日目：ふりかえり】

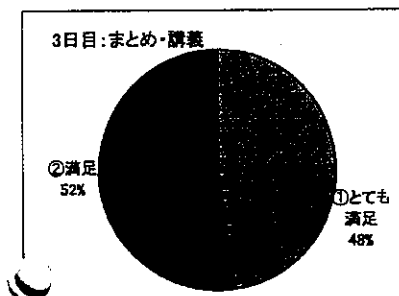
項目	人数
①とても満足	9
②満足	13
③普通	1
④あまり良くない	0
⑤良くない	0
⑥無回答	0



意見
①「とても満足」 ・今後参考になるお話を聞けて助かりました ・参考になりました ・良かった点や改善点をしっかり共有できたため ・還暦前にいい思い出ができました
②「満足」 ・もう少し振り返りの時間があったらよかった ・何を期待してフィールド発表作業をしていたのか各自の思いを知る機会となった ・疲労感を達成感が上回りました。「後は野となれ山となれ」は大切です ・良かった点を取り出して評価してくれるもんだなあ～と ・結果が良かったので前向きな意見が多く出た ・ボラレンの方々の講評を含め総括した

【3日目：まとめ・講義「北海道ボランティア・レンジャー協議会と、ボランティアを行うにあたって」】

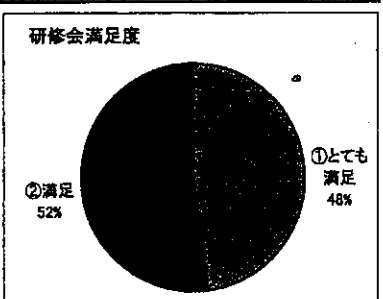
項目	人数
①とても満足	11
②満足	12
③普通	0
④あまり良くない	0
⑤良くない	0
⑥無回答	0



意見
①「とても満足」 ・今後参加したくなるような興味を持たせていただきましたし、自己の迷いが少し軽くなった気がします ・「知識・技術は手立て、大切なのは心」を心に留めて活動したいと思います ・生きていく上で大切なことを学べた ・時間が欲しい ・とてもわかりやすいプレゼンテーションでした。主旨がよく伝わってきました。スライドも良かったと思います ・説明がわかりやすかった ・会長さんの話が優しい口調でとてもわかりやすくよかったです
②「満足」 ・ボラレンの年間活動及び立ち位置を承知しました ・下見、本番、反省がボラレンの基本、とのこと。納得 ・何が重要なことか知ることができた。説明技術に長けることは関係ないことが分かりよかった ・春日会長の思いが痛いほど伝わりましたが、思いが強く出過ぎたかなと思います ・自然と向き合う心得を教えてください… ・場数、経験が必要 ・知識だけでなく、心が大切だというお話、よかったです ・旭川なのでなかなか参加できないと思いますが、自分自身の勉強のためにも良いと思います

2. 当研修会はいかがでしたか。(1項目選択)

項目	人数
①とても満足	11
②満足	12
③普通	0
④あまり良くない	0
⑤良くない	0
⑥無回答	0



意見
①「とても満足」 ・知識や経験からでのお話をもっと聞いていたくなりました ・参考になりました ・3日間がとても短く感じられた ・経験したことがないことをたくさん体験できた ・最初から最後までリラックスして研修を受けることができました ・これからの人生に大変参考になった ・内容の充実したプログラムでした。参加できたことをうれしく思います ・とても中身が濃いと思いました
②「満足」 ・緊急時の対応等は一般的内容でなくてもよいと思います。実施するのであれば、自然観察をする時に遭遇時での内容が望ましい ・同じ思いの人を知り、知識欲をかきたてられた ・プログラムはとても大変でしたが協力してできたことは楽しかった。これほどやった後の気持ちが違うことはありませんでした ・楽しい学びがあり優しい気持ちになれた ・グループ以外の方との交流ができるとよかったです



## I、参加者アンケート集約結果について<自然ふれあい交流館>

## II、ボラレン協力者のアンケートによる考察

### 1、事務局・研修部の反省

- ・育成研修協力者への連絡はしっかりと出来ていた。
- ・事務局と研修部との連絡・相談・報告は不足していた。
- ・その他

### 2、役員・育成研修協力者の反省

#### (1) 新しい人へのバトンタッチの試みはあったか。

- ・三輪、安倍、中林の各氏の参加があつてよかった。
- ・新しい人に依頼するとう雰囲気は（意図は）感じられなかった。
- ・講義担当者に新しい人を。これは何とかしていかなければ。（春日）

#### (2) 連絡や根回しについて

- ・役員会との兼ね合いもあるが、調整は事前に話し合った方がいい。  
（今年は、役員会前の相談はしなかった。）
- ・高齢化は進みますから、そのあたりも話し合つて

#### (3) 日程をこなしてみてもうすれば、もっと良くなるということはなかったか。

- ・二日目の野外実習（自然観察会）
- ・模擬ミニ解説
- ・グループワーク（プログラム作成）
- ・フィールド発表
- ・実施時期について

#### (4) ボラレン加入者の活性化

- ・新規ボラレン加入者には、お誘いのハガキを出した。
- ・加入はしないが「ボラレン活動の資料送付を希望する人」の取り扱い。
- ・観察会下見は、新加入者への配慮をした方がいい。

## 「事務局・研修部の反省観点」

I-1 報告・連絡は事務局か研修部か責任の所在が不明だったように思います。手分け

して連絡をするのはいいのですが、それを集約できていなかった。

例として協力者会議の案内ハガキを出すのに事務局長からでなくて菅さんから協力者を教えてもらった。

II 担当でなかったのでよくわかりません。

## アンケート

### 事務局・研修部の反省点

連絡方法が会員によって違い、難しところもありました。

（） 員会で名前が上がった会員に連絡をしてもさまざまな理由で断られることが多く、特にミニ解説などは育成研修会の日程が

決まったら、なんとかして新しい会員にあらかじめ頼めないものかと思いました。

会員によっては年間計画で活動なさっているの。

事務局長は会員の得意分野を知っているのだからもっと声かけをしてほしいです。

仕事の依頼…。では菅さんからキチンと連絡があり私は断る旨も解っていただきました。

## 「役員・育成研修会協力者の反省観点」

I-1 役員会の話し合いでも役員の中で担当するという雰囲気でした。新しい人という発想は感じませんでした。

-2 育成研修協力者に新しい人ということでは、三輪さん、安倍さん、中林さんにお問い合わせ出来て少数ですがよかったのではないのでしょうか。

III-1 自然観察会のボラレンは2名でよいと思います。時間が許されて、いつも通りの観察会が出来れば観察会の全体像が見えて楽しさが共有できると思います。

-3 B班の担当でしたが宮本さんの筆には参加者全員が感動した様子で手段はスムーズに決定したのでプログラム作成の迷いはなかった。逆に教わるが多かった。マンネリしている自分を反省しました。

-4 グループで発表していることを念頭に置くことなど、時間の制限をしっかりと認識させればよかった。

-5 お天気には恵まれなかったが、時期については今まで同様に固定しなくてよいと思います。

IV-1 新ボラレン加入者が観察会に来た時はお互い初対面でもあるので自己紹介など積極的に交流をはかりたいですしボラレンへの入会動機などを聞いてみるのはどうでしょうか。入会3年目ぐらいまでの方で希望者には育成研修会をサポートさせる形で参加させることはどうでしょうか。

-2 今年の取組で様子を見てはどうでしょうか。

育成研修協力者などに新しい人との考え方は最初からあったのですが開けてみるとあまり変わっていないと思いました。

日程をこなしてみても...は野外実習が普段の観察会のようにこの事でしたが少し詳しくなりすぎと思いました。時間配分の面を少し考慮する必要があるのでは。

ミニ解説...はそれぞれ個性がありとても良かったと感じました。できれば会員全員に聞かせたい、体験してもらいたい内容だと思いました。

グループワーク...今回は皆さんとてもこの会の関心度が高く積極的で大変上手くいったと思います。

フィールド発表...時間を2分ぐらい延ばせないか？実際は長くなっていますが参加者が時間の件でかなりエネルギーをつかっています。

実施時期...は春か秋がテーマを絞しやすいので今が良いです。

ポラレン加入者の活性化について...今回の観察会のご案内をお知らせするのは大変良い事だとおもいます。お友達を連れてきてもらえるかも。

すでに会員の方の中に特技とか感心がある分野をこちらに発信して貰う方法はないものではないでしょうか？

全体的に思うのは若い会員が面白みが見出せないでいるのでは...近年加入の方が会に何か期待、希望をもっているか聞き出せないものではないでしょうか？

感じた事をありのまま書き込みました。

#### 役員・育成研修会協力者の反省観点

##### Iについて

新しい人にはやはり早い段階で依頼しないと日程が難しいと感じました。役員会との兼ね合いもあるのでそのへんの調整を事前に話し合っておくのもいいのでは。高齢化はますます進むと思われそうですがその中でも交代は必要と感じます。

##### IIについて

- 1について、野外実習はベテランと新人というような組み合わせで。
- 2については上記で話したので。
- 3については今回の基本一人でいいと思います。
- 4について今回の安倍さんの講評はよかったです。
- 5について、個人的には毎年違う月がいいと思いますが交流館の都合もあるでしょう。

##### IIIについて

- Iについて、まずは下見会に誘ってみる。話を聞いて活動しやすいように働きかける。
- 2について、初めてなのでどうなるか注視したいです。

あまりこれという考えも浮かばず、担当者を決めるのは難しいと感じました。  
11月15日の反省会は出席します。

反省会とのことです。思ったことです。

・全体としては、13名も新会員が増えたことをもって評価できるのかと思います。(昨年に比べていかがだったのでしょうか)  
この人数や新会員の年齢構成が、当初お考えだった計画に照らし合わせてどうかで判断できるように思います。

・最終日のみ様子を見させていただいた個人的な感想では、参加者の皆さんはみな楽しそうに、主体的にプログラム作りに参加されたいようでした。発表も皆さん素晴らしい完成度で驚きました。

# 北海道ボランティア・レンジャー協議会 平成25年度第3回役員会議

平成26年1月24日(金曜日) 16:30~18:30

札幌エルプラザ2階 会議コーナー

欠席者: 五十嵐

## 会長挨拶

### 《報告事項》

各部の25年度事業の後半の報告(9月~1月)

#### (1) 総務部

会員の動向

育成研修会における入会者 23名の受講者の内13名が入会

忘年会(12月7日) 27名

#### (2) 研修部

観察会(9月~1月) 資料1

①秋の花でにぎわう森を歩こう(野幌) 9月7日(土) 下見・「ノッポログンクビソウ」

(佐々木幸夫) 会員13名

共催 (担当内山、土屋) 9月8日(日) 一般参加者88名、会員12名

②芸術の森観察会(札幌市南区) 10月5日(土) 下見・「菊」(成田伸一) 会員9名

主催 (担当成田、三崎) 10月6日(日) 一般参加者9名 会員6名

③秋の森の匂いをかごう(野幌) 10月9日(水) 下見・「公園の種類」(土屋忠司) 会員11名

共催 (担当菅、室野) 10月10日(木) 一般参加者61名 会員9名

④晩秋の森観察会志文別コース(野幌) 11月2日(土) 下見 会員8名

主催 (担当佐藤、三崎) 11月3日(日) 一般参加者17名 会員7名

⑤秋のありがとう観察会(野幌) 11月9日(土) 下見・「越冬」(小林英世) 会員11名

共催 (担当小林、土屋) 11月10日(日) 大雨のため中止 会員10名

⑥西岡水源地自然観察会(豊平区) 11月22日(金) 下見・ 会員5名

主催 (担当熊野、宮津) 11月23日(土) 一般参加者21名 会員15名

⑦円山登山観察会(中央区) 1月18日(土) 下見 会員9名

主催 (担当大藤、渡辺、熊野) 1月19日(日) 一般参加者6名 会員12名

#### 育成研修会

①8月8日(木) 育成研修会推進会議 (夏の森の観察会の後、春日・内山・室野・松井)

②9月4日(木) 第2回役員会議(講師・協力者の選定)

③9月26日(木) 育成研修会協力者会議

④10月25日(金)~27日(日) 育成研修会 受講者23名 入会者13名

⑤11月16日(水) 育成研修会反省会 12名

#### (3) 広報部

○機関紙エゾマツの発行

10月28日(月) 「エゾマツ」秋季号 106号 の発行

1月28日(火) 「エゾマツ」冬季号 107号 の発行予定

○自然観察 Now の発行

- 9月8日(日) No.5 「スズメバチへの備え」 五十嵐一夫  
10月10日(木) No.6 「野幌森林公園のオサムシ」 土屋忠司  
11月10日(日) No.7 「イラガの越冬」 小林英世

(4) 事務局

○きのこ日帰り研修会 (担当 内山)

9月19日(木) きのこ研修会 道民の森(月形) 講師 松原健一 会員参加者 10名

○秋のクリーンクリーン野幌森林公園 (道立自然公園野幌森林公園管理運営協議会)

10月31日(木) 9:20~12:00 登満別駐車場集合 参加者 7名

○来年度事業計画会議

12月21日(土) 10:00~12:00 北海道開拓の村・停車場 出席 春日、小林、室野

《協議事項》

平成26年度事業計画・役員改選

1. 来年度の役員について
2. 来年度事業計画について(資料 2、3)

- (1) 計画方針
- (2) 観察会事業
- (3) 研修会事業
- (4) 防除清掃活動事業
- (5) 役員会議・総会
- (6) 機関紙「エゾマツ」の発行

3. 平成26年度総会の準備

- (1) 総会時の研修会の講師 胆振地区 苫小牧市 谷口勇五郎氏
- (2) 議長、議事録署名人
- (3) 役員選考委員
- (4) 会場 4月19日(土) 13:30~16:00 エルプラザ2F 環境研修室 確保
- (5) 来賓依頼 北海道環境推進課、北海道自然ふれあい交流館、
- (6) 総会冊子

4. ボラレン30周年記念事業の勧め方について

## 資料1 後期事業の報告(メーリングリスト)

### 秋の花でにぎわう森を歩こう(共催)報告

観察会下見 9月7日(土) くもり時々小雨

交流館～エゾユズリハコース～志文別線～四季美コース～カツラコース～交流館

参加者13人

話題提供の五十嵐さんがお休みでしたので佐々木幸夫さんに「ノッポログンクビソウ」について  
観察会 9月8日(日) 晴れ 10:00～14:30

一般参加者 88人 ボラレン参加者12人

8グループで上記の観察会コース(約6km)を歩く

咲いていた花・・・アキノキリンソウ・エゾイラクサ・エゾゴマナ・エゾトリカブト・エゾノコンギク・  
エゾミソハギ、オオバセンキュウ・オオヨモギ・キツリフネ・キンミズヒキ・ケチヂミザサ・ゲンノシ  
ョウコ・コシロネ・ゴボウ・サラシナショウマ・シロツリフネ・セイタカアワダチソウ・ツルニンジン・  
ツルリンドウ・ハナタデ・ヒメシロネ・ミズタマソウ・ミズヒキ・ミゾソバ・ミミコウモリ・ムカゴイ  
ラクサ・ヤブハギ・ヤブマメ・ヤマニガナ・ユウゼンギク・

鳥・・・ アオバトとヤマゲラの声

その他・・・ スズメバチの仲間、バツタの仲間、カミキリの仲間、マイマイの仲間、カンタン、  
ザトウムシ

※ 赤、ブルー、黒などに輝く実をつけたもの、早くも葉っぱを落としはじめたもの、キノコもいろい  
ろ、ヤマブドウやサルナシの実

9月に入り森の中はすっかり秋の気配でした。

※ 大沢の池は水門を閉じているので繁茂していたヤナギ類が枯れていました。

※ その他お気づきのことありましたら、追加訂正などお願いいたします。

担当: 土屋忠司 内山恭子 報告: 内山恭子

### きのこ研修会の報告(内山恭子)

日時・9月19日(木) 10時～14時(晴れ 22℃)

場所・道民の森月形地区 講師・松原健一さん

藻岩キノコ会の会員でもある松原さんのご案内で月形地区の散策路をキノコを探して歩き採集しました。

前日まで雨の多い日々でしたので、いろいろなキノコに出逢いました。

採集後、陶芸館前のベンチに採集したキノコを並べ、次々と同定して下さった松原さんに敬服です。

色、形が似た者同士、成長過程も様々、私にとっては植物の同定より難しいものでした。

- ・アカモミタケ・ウグイスチャチタケ・オキナハツ・カラハツタケ・ガンタケ・キサマツモドキ
- ・キツムタケ・キハツタケ・クサウラベニタケ・クロサカズキシメジ・クロハツ・コウモリタケ・コショウイグチ
- ・サカズキシメジ・ザラエノハラタケ・シイタケ・シロハツ・タケリタケ・タマゴタケ?チチタケ・ツエタケ
- ・テングタケ・ドクベニタケ・ニガクリタケ・ヌメリシギタケ・ハタケシメジ・ハンノキイグチ・フウセンタケの仲間
- ・ベニテングタケ・ホウキタケ・ホテイシメジ・ポリポリ・モリノカレバタケ・ヤマイグチ・レンガタケ

以上はメモしたものですのでミスがあるかもしれませんが訂正などありましたら教えて下さい。以上36種です。

松原さん特製のキノコ汁で昼食、今回はハタケシメジ、シイタケのおみやげ付きその上お月見用のススキまで頂戴して秋満喫でした。

記 内山恭子

## 観察会 「秋の森の匂いをかごう」の報告(菅)

10月9日 (水) 曇り～雨 ポラレン参加者 11名

話題提供者 土屋忠司さん 「都市公園について」でした。日頃何気なく訪れている公園の位置づけや目的がとてもよくわかりました。

下見会 途中から雨になりましたが色々な植物や生き物にであいました。

10月10日 (木) 快晴 一般参加者 61名 ポラレン参加者 9名

木本 アオダモ、アサダ、アキグミ、イワガラミ、ツルアジサイ、オオカメノキ、ツリバナ、オオツリバナ、ツルウメモドキ、カシワ、カツラ、カンボク シナサワグルミ、ミズナラ、キタコブシ、クリ、ウダイカンバ、ケヤマハンノキ、サルナシ、サワシバ、シウリザクラ、シナノキ、ツタウルシ ナナカマド、ナニワズ、ハイイヌガヤ、ホオノキ、フッキソウ、ミズキ、ミヤマガマズミ、ヤチダモ、ヌルデ、ヤマブドウ、トドマツ、ニガキ

草本 アケボノソウ、エゾイラクサ、エソトリカブト、オオアワダチソウ、オオウバユリ、オオキヌタソウ、オオバセンキュウ、カノツメソウ キンミズヒキ、ケチジミザサ、サラシナショウマ、ススキ、ツルリンドウ、ノブキ、ノラ  
ンジン、バイケイソウ、ハナタデ、イヌタデ、フタナ、マムシグサ、ミゾソバ、ヤブタバコ、ユウゼンギク、トチバニンジン、ルイヨウショウマ、トケンラン、サイハイラン、アケボノシュスラン、ミヤマナルコユリ、シオデ、エゾゴマナ、サカゲイノデ、ミヤマワラビ、ホソイノデ、ホソバナライシダ

生き物 サッポロマイマイ、オカモノアラガイ、アキアカネ、カナヘビ、メノコツチハンミョウ(オスとメス)、カイツブリ(オスとメス)、マガモ

などが観察できました。天気もよくカツラも良い匂い、紅葉も始まり楽しい観察会でした。

担当 室野、菅

## 西岡公園観察会の報告(熊野)

2013年11月22日 下見会 ポラレン会員 5名参加

11月23日 本番 一般参加者 21名 ポラレン参加者 15名

観察できたもの

鳥、他の生き物等

マガモ雄雌 カワアイサ雄 ヒヨドリ ヒレンジャク ヤマガラ コゲラ ヒガラ エゾリス  
ヤマユギのスカシダワラ ウスタビガのマユ フユシヤクの仲間

植物は種子、果実、冬芽、枯葉、蕾などの観察

草もの

クマイザサ、ミヤコザサ、チシマザサ、ヨシ、オオアワダチソウ、トモエソウ、エゾゴマナ、サラシナショウマ、ミズバショウ、トクサ、セリ、オオウバユリ、フデリンドウ(蕾)

ジンヨウイチヤクソウ、ウメガサソウ

木もの

ヨーロッパトウヒ、キミノミズ、(実) ヤチダモ、ノリウツギ、フッキソウ(実)、ツルウメモドキ(実)、ヤマブドウ(実) タラノキ、オニグルミ、ハルニレ、バッコヤナギ、ヤドリギ  
一般参加者は西岡公園観察会では多数でした。ポラレンの参加者の中には今年の育成研修会にて会員になられた方お2人がおりました。

バッコヤナギが早くも白い綿毛をだし、ヤマブドウがすずなりにぶら下がり、ツルウメモドキが見事に赤く弾けておりました。

担当 宮津 熊野(報告)

## 秋のクリーンクリーン野幌森林公園の報告（内山）

「平成25年度秋のクリーンクリーン野幌森林公園」は今日（10月31日）秋晴れのもと終了しました。

ボラレンからは7名の参加でした。

これは道立自然公園野幌森林公園内に不法投棄されたゴミを行政機関と関係団体で回収します。

野幌森林公園内の基線を瑞穂口と登満別2方向からゴミを拾いながら歩きました。

空き缶などは当然、驚くような大型ごみも江別市のトラックにいっぱい積まれました。

## 円山登山観察会の報告（大藤）

下見 気温：-3℃ 参加者（順不同）：三崎・熊野・菅・室野・山田・大藤・渡辺・吉川・上野

以下、本日見られたものの報告です。

冬芽：シウリザクラ、ヤマグワ、ニガキ、ツリバナ、ウリノキ、キタコブシ、オオバボダイジュ、シナノキ、ホオノキ、アズキナシ、アサダ、エゾニワトコ、サワシバ、アオダモ、マユミ、ハクウンボク

果実（種子）：カツラ、ツルアジサイ、イワガラミ

鳥：ハギマシコ、マヒワ、ウソ、コゲラ、アカゲラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラ

動物：キタキツネの足跡がたくさんありました。また八十八箇所登山口付

近でタヌキを見たとの情報もありました。

昆虫：ゼフィルスの卵（頂上少し手前右側の昨年と同じオニグルミおよび動物園ルートフェンス横のオニグルミについています。オナガシジミの卵だと思われます）

その他：ミズナラメコガタニセハナフシ（中腹の平らなところに4つ）

本番 天 気：曇り～快晴 気温：-4℃ 一般参加：5名 ボラレン：15名

少々寒かったのですが、ウソやコゲラなどを近くで観察でき、頂上からは遠くの山々まで見渡すことができました。また、下山時には快晴となって美しい冬景色の中を散策できました。

以下、本日観察・解説したものです。

### 【植物】

カツラ、シウリザクラ、ヤマグワ、ニガキ、ツリバナ、ツルアジサイ、イワガラミ、ノリウツギ、ツノハシバミ、ウリノキ、キタコブシ、オオバボダイジュ、シナノキ、ホオノキ、アズキナシ、アサダ、エゾニワトコ、アオダモ、マユミ、ヤドリギ、ハクウンボク

### 【鳥】

ハギマシコ、マヒワ、ウソ、コゲラ、アカゲラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラ、カワガラス（円山川にて）、クマゲラ（鳴き声のみ）、ヤマゲラ（鳴き声のみ）

### 【動物】

エゾリス、キタキツネ（足跡のみ）

### 【昆虫】

ゼフィルス（オナガシジミ）の卵

### 【その他】

ミズナラメコガタニセハナフシ

本日参加されました皆様、寒い中お疲れさまでした。

担当：熊野・渡辺・大藤



## 資料2

### 平成25年度事業計画

#### (1) 事業計画の方針

目標 「自然との共存、日常の実践から」

#### 重点

- ① 会員の意見や社会の要請を受け止め、会の活動改善に生かす。
- ② 観察会と研修会の充実に努める。
- ③ ボラレン入会者の勧誘に努める。
- ④ 学ぶボラレンをめざす。
- ⑤ 全道的な視野に立つ。
- ⑥ ボラレン30周年の取り組み（2016年に30周年）

#### 具現化の視点

- ① ボラレンの進む方向と活動領域の広がりを模索する。
- ② 会務のシステム的な遂行を試みる。
- ③ 育成研修会のボラレン担当部分の充実に努める。
- ④ ボラレン会員の勧誘に努める。
  - ※1, 様々な場面を通して育成研修会のPRに努める。
    - ・(例) 観察会の場で参加者へ育成研修会開催を知らせる。  
知人などへ、口コミを通して育成研修会開催を知らせる
  - ※2, 育成研修会受講者への働きかけ
    - ・当日の入会勧誘
    - ・本人の了解を得て育成研修会受講者には、当年度を含めて1年間、主催観察会・共催観察会のお知らせ文書を発送する。
- ⑤ 観察会下見時の話題提供を通し会員同志の相互交流を図る。
- ⑥ 主催事業のPRに努める。
- ⑦ メールリストやホームページを有効に活用する。
- ⑧ ボラレン活動の全道的な活性化を目指す。
- ⑨ ボラレン30周年準備会を立ち上げる。(2016年に30周年を迎える)

## 住所変更など

## 部外秘ですので、取扱には十分注意してください

### \*新会員

山田義勝

〒065—0014 札幌市東区北14条東15丁目1—55

### \*住所変更など

#### ・石狩 NO104 井口博貴

〒069—0853 江別市大麻高町16—5

TEL 080—3195—8193

#### ・石狩 NO64 安倍 隆

〒004—0041 札幌市厚別区大谷地東5—1—15—610

#### ・上川 NO138 浦 澄子

〒078—8350 旭川市東光10条4丁目4—12

(追加)

### \*電話番号の掲載

#### ・石狩 NO91 クローズ千鶴子

TEL 001—384—0765

#### ・石狩 NO87 三輪礼二郎

TEL 011—898—0713



# H25 研修会ダイジェスト

十勝研修会  
6月1,2日

ケショウヤナギの群生地・帯広野草園・岩内仙峡を訪れました。



様似研修会  
6月29,30日

高山植物再生実験地の  
笹刈り、アポイ岳登山、  
幌満のかんらん岩の現場の  
観察などを行いました。



鶴川研修会  
7月12,13日



ネイチャー研究会in鶴川・室蘭開発建設部・室蘭工大生の皆さんと鶴川河口の人工干潟の草刈りを行いました。



中谷良弘氏の案内で、大雪山国立公園・層雲峡で地質観察研修を行いました。テーマ：「大雪山の生い立ちを探る」



道北研修会  
7月20,21日

浮島湿原を散策しました。



オホーツク支部研修会  
9月14,15日

丸瀬布昆虫生態館の喜田氏による講演  
「オホーツク地域における在来昆虫の生態－在来種による生物多様性への影響－」



白滝ジオミュージアムを見学しました。

私たちが散策や観察会で訪れる公園は、営造物公園と地域性の公園に分かれます。営造物公園は、主に都市公園と言われ、街中であって、街に住んでいる人々やその近辺に住んでいる人々が、休憩、散策、運動等を楽しむための場所です。

地域性の公園は、国立公園、国定公園、自然公園があり、優れた自然の景勝地を保護し、その利用促進と国民の保健、休養のための場所です。今回は都市公園について調べてみました。

#### 1、都市公園とは

都市公園は、国及び地方公共団体により設置された公園又は緑地で、遊具や樹木等の公園施設も含まれます。

#### 2、公園の種別

○住区基幹公園は、住区設定に応じ計画される公園で、主として市街地内に設けられ、都市住民の日常的な利用に供されます。特に市街地内は緑に代表される自然的環境が乏しい地域なので植栽や芝生等で緑化されます。

##### ア街区公園

地区の実情に合わせ、児童の遊戯、運動等の利用、高齢者の運動、憩い場等に配慮し、遊戯施設、広場、休養施設等が設置された最も身近な公園として、誘致距離 250m の範囲内で 1ヶ所当たり面積 0.25ha を標準として配置します。

##### イ近隣公園

主として、近隣に居住する者の利用に供することを目的とする公園で、1近隣住区当たり 1ヶ所を誘致距離 500m の範囲内で、1ヶ所当たり 2ha を標準として配置します。施設は児童のための自由広場、青少年野球広場、散策や休憩の出来る施設を整備します。

##### ウ地区公園

主として、徒歩圏内に居住する者の利用に供することを目的とする公園で、1ヶ所当たり面積 4ha を標準として配置します。施設は、近隣公園と同等のほか、野球場の専用のグランド、災害時における避難地として利用出来る広場を整備します。

○都市基幹公園は、都市全域を対象区域として、都市の地域性、性格等に係わりなく都市住民全部の利用に対応する機能を有するものです。公園の機能は利用機能を主体とし、都市環境の改善や災害時の広域避難地としての機能は重要です。

##### エ総合公園、

都市住民全般の休息、鑑賞、散歩、遊戯、運動等、総合的な利用に供することを目的とする公園で、都市の規模に応じ1ヶ所当たり 10ha～50ha を標準として配置します。施設は自由に使える運動施設、野外劇場、都市緑化植物園、温室、噴水等を整備します。

##### オ運動公園

都市住民全般の主として運動の用に供することを目的とする公園で、都市の規模に応じ1ヶ所当たり面積 15～75ha を標準として配置します。施設は公式公認の野球グラウンド、テニスコート、サッカー場、プール、体育館等を整備します。

○特殊公園は資源によって立地が成約されるものや、特殊な利用に供される公園です。

#### カ風致公園

主として風致を享受することを目的とする公園で、樹林地、水辺地等の自然条件に応じ配置します。

#### キ動植物公園

動物園、植物園等特殊な利用に供される公園で、都市規模に応じて適切に配置します。

#### ク歴史公園

歴史、名勝、天然記念物等の文化財を広く一般に供することを目的とする公園で、文化財の立地に応じ適宜配置する。

#### ケ墓園

その面積の3/2以上を園地等とする景観の良好な、かつ屋外レクリエーションの場として利用に供される墓地を含んだ公園で、都市の実情に応じ配置します。

#### コ広域公園

主として、一つの市町村の区域をこえる広域のレクリエーション需要を充足することを目的とする公園で、地方生活圏等ブロック内の可能な場所に1ヶ所当たり面積50ha以上を標準として配置します。施設は住民の週末型の屋外レクリエーションに対応できる施設を配置します。

#### サ緩衝緑地

大気汚染、騒音、振動、悪臭等の公害の防止、緩和、若しくはコンビナート地帯等の災害の防止を図ること目的とする緑地で、公害、災害発生源地域と住居地域等とを分離遮断することが必要な位置において、状況に応じ配置します。施設は、比較的高密度に植栽をします。

#### シ都市緑地

都市の自然的環境の保全及び改善並びに都市環境の向上を図るために設けられる緑地で、1ヶ所当たり面積0.1ha以上を標準として配置します。施設は、都市景観の向上に役立つよう植栽地を主体に配置する。

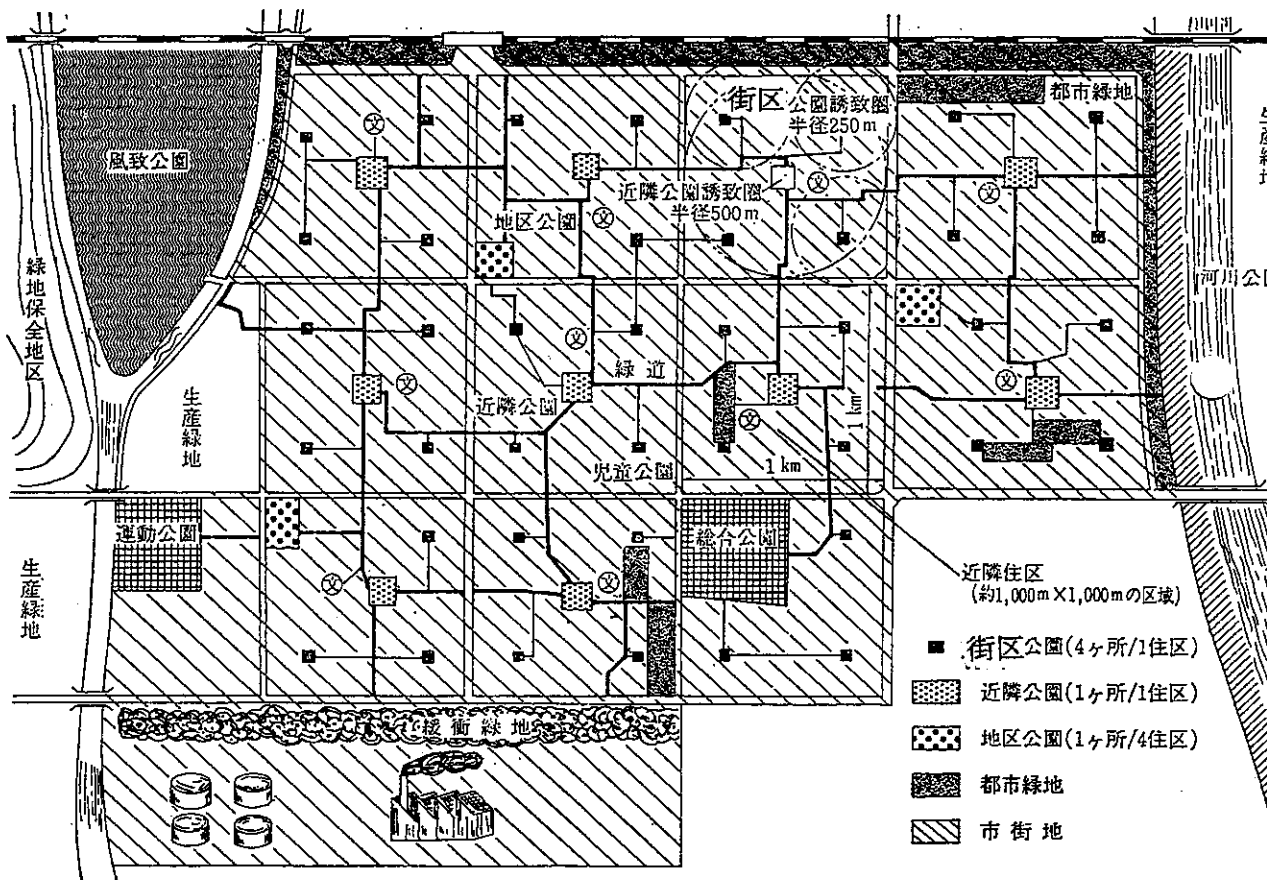
#### ス緑道

災害時の避難路の確保、市街地における都市生活の安全性及び快適性の確保を目的として、近隣住区内に設けられる植樹帯、歩行者路、自転車路を主体とする緑地で幅員10~20mを標準に配置します。

#### セ国の設置に係る都市公園

一つの都府県の区域を超えるような広域的な利用に供することを目的として国が設置する大規模な公園で、1ヶ所当たり面積おおむね300ha以上を標準として配置し、国家的な記念事業等として設置するものにあつては、その設置目的にふさわしい内容を有するように整備します。

※ 1住区は1k m<sup>2</sup>程度で、人口は約10,000人を想定するものとし、幹線街路、鉄道で分断されない地域とし、一つのコミュニティーを形成する地域とし、1住区に街区公園4ヶ所、近隣公園を1ヶ所、又4～5住区に地区公園を配置します。



都市公園等配置模式図

### 3、北海道の都市公園の現況

北海道の都市公園は(平成24年3月現在)95市町村で開設されており、7,421ヶ所、面積は13,402haとなっています。これを人口一人当たりの公園面積に換算すると27 m<sup>2</sup>の広さです。

また、全国の一人当たりの公園面積は9.9 m<sup>2</sup>となっており、北海道は都道府県の中で全国一番の広さとなっています。

#### 4 国営公園と道立公園

札幌市にある滝野すずらん丘陵公園は、道内でただ一つの国営の都市公園です。ほかに、北海道が広域公園として設置した11ヶ所の都市公園があります。(真駒内公園、野幌総合運動公園、子どもの国、噴火湾パノラマパーク、道南四季の森公園、十勝エコロジーパーク、ゆめの森公園、オホーツク公園、オホーツク流水公園、宗谷ふれあい公園、サンピラー公園)

#### 5、ボラレンより観察会が開催されている都市公園の種別

恵庭公園「総合公園」 芸術の森「特殊公園」 西岡水源地「特殊公園」  
円山公園「総合公園」

# 歌の中に生きる花 オオマツヨイグサ

平取町 川村 桂介

## 宵待草

待てど 暮らせど こぬひとを  
宵待草の やるせなさ  
こよいは月も 出ぬそうな

これは、多 忠亮(おほ ちぢやう)の曲を得て不朽の名作として歌い継がれている竹久夢二の「宵待草」である。

夢二は恋と放浪に生きた画家で、倦怠感ただよう繊細な美人画を得意とし、小川未明などと雑誌「少年文庫」の編集に係わりながら表紙絵や扉絵、挿絵を描くほか「コドモノクニ」などの少年少女雑誌に挿絵とともに詩歌をも発表していた。

夢二の描いた女性像は、なで肩で柳腰の倦怠感ただよう魅力的な女性で、そのモデルとなったのは絵草紙屋「つるや」の店番をしていた岸 他万喜と言われている。夢二と他万喜は結婚したが、たった3年で離婚している。

さて、この宵待草の誕生のいきさつであるが、それは他万喜と離婚した翌年の夏、千葉県銚子へ出かけたことが始まりである。滞在した海鹿(いしか)島の民宿の隣に豪邸があり、そこに長谷川カタというきれいな女性が住んでいたのである。夢二はすぐさまその女性に一目惚れし、熱心に口説いて海岸を散歩するまでになる。しかし、カタの父親は、その道ならぬ恋を許さなかった。(に囁きかたは、なぜか離婚した他万喜も同行していたという。) 夢二はカタとの恋をどうしても諦め切れず翌年の秋に再び海鹿島を訪ねていったのであるが、カタは夢二が訪ねる数ヶ月前に嫁いでいってすでに村を去ったあとであった。

秋風の立つ松林をカタとのひと夏の思いを胸に散策しているうちに、ふと見つけたのがオオマツヨイグサの群生だったのである。夏の夕べに黄色の四弁の花を咲かせ、あしたには萎む花・・・夢二はこのオオマツヨイグサを失恋のやるせない心情をこめて詩的に宵待草と呼んだのであった。

「宵待草」は、大正2年に刊行された夢二の処女詩集「どんたく」に今歌われている型の三行詩で発表されたが、その元歌は一年前、雑誌「少女」に八行詩で発表されていた。

やるせない  
釣鐘草の夕べの歌が  
あれあれ 風に吹かれて来る  
までどくらせど来ぬ人を  
宵待草の心もとなき  
「おもふまいと思えども」  
われとしもなき ため涙  
今宵も月は出ぬそうな

この八行詩が「絵入り小唄集・どんたく」では、あの美人画の挿絵も入れられて三行詩として発表されたのである。

これに目を付けたのが東京音楽学校に学ぶ多忠亮である。多は夢二から曲を付ける許可をもらい曲付けをして出来上がった楽譜を夢二のもとに送ったのであるが、それを受けた夢二は、思い出の詩に短調の抒情的なメロディーを付けて素晴らしい息吹を与えてくれた作曲家に、涙を流して礼を述べたという。



西条八十は、夢二に「この唄は私も好きですが、レコードなどで同じ歌詞を二度繰り返すのは芸がない気がします。どうです。もう一連書き足されては」とすすめたそうである。夢二は、今をときめく新進詩人に対し、「あなたにでも書いていただくか」と寂しそうに笑ったという。

八十はこの言葉を得て、夢二の死後4年後に「宵待草」が映画化された時、

暮れて河原に星ひとつ

宵待草の花の露

更けては風も泣くそうな

ともう一連付けたしたのである。それをヒロインの高峰三枝子が映画の中で歌う運びになったのである。

しかし、夢二の原作を尊重するなら、同じ歌詞を2回歌ったとしても、そのほうが好ましいように思う。八十の詩は確かに整合性もあり悪くはないが、八十の詩を付けたした歌詞で歌われているものをまだ一度も聞いたことはない。

私も、人並みに恋もし失恋もする多感な少年時代を過ごしたのであるが、ラジオやテレビで、この「宵待草」や、土屋花情の「さくら貝の歌」、北見志保子の「平城山」、林古溪の「浜辺の歌」などをソプラノ歌手の中沢桂や曾我栄子が歌うのを、そして石川啄木の「初恋」を奥田良三や立川清登たちが感情豊かに熱唱するのをしんみりと聞いていたものである。

ところで、この唄に詠まれている宵待草であるが、前述したとおりオオマツヨイグサのことである。マツヨイグサの仲間、オオマツヨイグサの他にも何種類かあるが、殆どの花が夕方に咲き始めるということで宵を待つ草・待宵草と表現し命名されたのであろう。オオマツヨイグサを俗に月見草とも呼ぶが、これは間違いである。ツキミソウもマツヨイグサの仲間ではあるが白い花を付ける別の種で、夕方に咲くその白い花を夕月に例えて呼んだのである。

ツキミソウは、ほかのマツヨイグサなどと共に1850年頃に渡ってきているが、繁殖力が弱く野生化できず、現在はほとんど見られないという。

北海道では、マツヨイグサ属の植物はメマツヨイグサやアレチマツヨイグサそれにヒナマツヨイグサ等が見られる。海岸の砂浜や耕作放棄地、駐車場やグラウンドの回り、住宅造成地や道端などで群生して生える外来種である。

「宵待草」の詩には、宵待草の花が静かな秋の夕暮れに、来るはずのない人を待っている心情をその花に懸けて用いられているのであるが、ならば宵待草があちこちにいっぱい群生する花ではなく、浜辺や小高い丘などに一輪あるいは二輪とぽつんとひっそりと咲く花であったなら、もっと趣があったのになあと思うのである。

<オオマツヨイグサ> 他の種より大きな花を付ける（花の径が5cm以上）ことで区別できるが、北海道では極めて少ない。高さは1.5mぐらい。

<ヒナマツヨイグサ> 他の種より高さが低く30cm位しかなく、花は昼咲きで花径も1.5cmと小さいことで区別できる。苫小牧の空き地で去年確認している。

<メマツヨイグサとアレチマツヨイグサ> アレチマツヨイグサの花弁間には隙間があるが、メマツヨイグサには隙間がないことで区別できる。花径は両種とも2~3cmで、北海道で見られるものは殆どがこの2種のいずれかである。高さはどちらも1.5m位。

(2014・1・10)

# 昆虫の冬越し

小林 英世

昆虫は、種によって卵、蛹、幼虫、成虫の姿で越冬します。

越冬する環境は、木の枝の卵や繭の中、樹皮の隙間、落ち葉の中、地中、木の枝、草の茎の中など、種によって異なり、氷点下でも昆虫の体が凍らないのは、越冬するそれぞれの環境の樹皮や落ち葉、土が保温材となって昆虫の凍結を防いでいると考えられています。

これらの環境の中で最も一定の温度が保たれるのは地中で、外気温の影響を最も受けやすいのは、枝上の卵や繭であると考えられます。しかし、観察地域でも2月初旬には気温は氷点下になり、高山や寒冷地域の気温はさらに低く、 $-10^{\circ}\text{C}$ 以下になることも珍しくありません。昆虫の卵や繭には、それでも昆虫の体が凍らないほどの保温効果があるのでしょうか。成虫で越冬するチョウやハチは、 $-20^{\circ}\text{C}$ くらいまで凍らない過冷却という現象を利用して越冬しています。しかし、体が水に触れると $-20^{\circ}\text{C}$ 以上でも凍結し、死んでしまうという。昆虫の卵の殻や繭には昆虫の体と水との接触を防ぎ、昆虫の体を凍結から防護する効果があるようです。

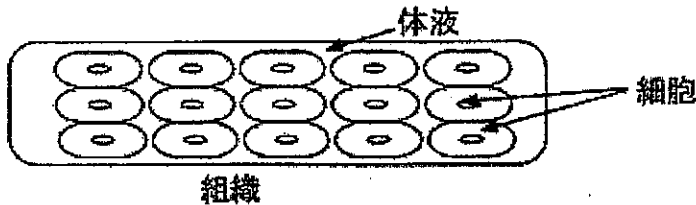
一方、昆虫の中にはグリセリンなどの物質を作り出すことで越冬に耐える耐凍性を持つ種もいます。蛹で越冬するキアゲハは、過冷却温度 $-23.5 \pm 2.2$ 、耐凍度 $-30^{\circ}\text{C}$ の防寒能力を有します。朝比奈によると、昆虫は休眠して越冬するが、休眠とは変態のいずれかの段階でその成長の課程を一時停止するだけで、必ずしも動かないというわけではなく、幼虫や成虫は歩いたり、飛ぶこともできるそうです。冬に先立ち休眠することで、「晩秋などかなり暖かい日が続いても、餌のない時期に卵から幼虫がかえったり、チョウが羽化したりして死の危険にさらされることを巧みに防いでいる」という。このような能力を「昆虫は長い進化の過程で、そのすみ場所の環境条件に適合して獲得した、生き残るための戦略のひとつです。クワガタを含む大部分の越冬昆虫は、その体がいったん凍結すると生命にかかわる障害をうけます。そのような凍結に耐えない昆虫たちを、非耐凍型昆虫 (freeze intolerant insects) と呼び、またこのような昆虫は過冷却能力が非常に大きくて凍りにくいものが多いので、防凍型昆虫 (freeze avoiding insects) ともよばれています。

過冷却 (supercooling) とは、水又は水溶液 (昆虫の場合は血液) が、凍り得る温度まで冷却されているのに、凍りださない現象のことを言い、昆虫はこの現象を利用して凍結を防いでいます。しかし過冷却している水又は水溶液をさらに冷却していくと、必ずある温度で凍りはじめます。この原因は、その温度でちょうど働くような氷核形成物質 (鉱物・動植物の小さな結晶・細菌など) が、その水分中に十分あったからだと考えられ、したがって水をよく過冷却させるためには、そのなかにある

- (1) 氷核形成物質の数量を減らす。
- (2) 氷核形成物質のまわりに水分子が集まりにくいようにさせる。あるいは水分子が集まっても氷としての結晶配列をとりにくくさせるなどの方法が有効と考えられます。

非耐凍型の越冬昆虫の多くは非常に過冷却されやすく、日本の昆虫でも $-20^{\circ}\text{C}$ 以下の過冷却点をもつものがごく普通であり、このような現象の起こる原因については、その虫の血

## 1.凍結のしくみ



- ①細胞外凍結…細胞を満たしている体液が凍結するが細胞は凍結しない。
- ②細胞内凍結…細胞を満たしている体液が凍結し細胞も凍結し細胞が破壊される。

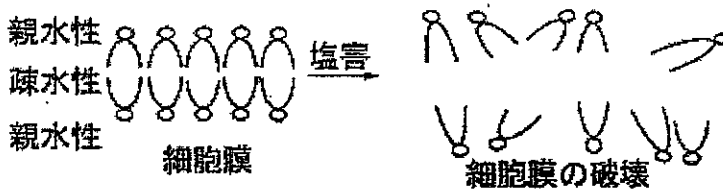
実験結果によるとエゾシロチョウは凍結するが再び生き返ったということは細胞外凍結は起こっているが細胞内凍結は起こっていないために生存が可能であると言われています。

だからエゾシロチョウは冬期間、細胞外凍結をしたり溶解したりしていることを繰り返しているように思われ、このように細胞内凍結を防止している物質にはグリセリンなどのような耐凍性物質が関係していると言われています。

## 2.グリセリンの細胞内凍結防止のしくみ

血球が凍結すると、大部分の水が氷となり残りの水が少なくなって塩分の濃度が高まってくる。その為、細胞の膜にある細胞膜の脂質が溶けだして細胞が破壊されてしまう。

ところがグリセリンが入ってくるとグリセリンが凍結しない分だけ塩分濃度が薄められ細胞の塩害が少なく細胞の破なわち細胞膜の破壊が起こらないと考えられています。



越冬(えっとう)とは、季節の変化がある地域において、生物が気温の低下する冬を乗り切ること。昆虫の場合、生活史の上で、越冬する段階が決まっているものが多い。幼虫で越冬するものを幼虫越冬、成虫で越冬するものを成虫越冬などと表現し、成虫で越冬するものはあまり多くありません。低温の時期を、不活発な状態で動かないで乗り切ることを冬眠といい、変温動物では、気温が下がれば当然不活発となるが、日が当たれば動き出すことも可能になる。そこで、あえて日の当たらないところに潜り込んで、冬を過ごしてしまうのが冬眠です。従って、冬に昆虫を探すには、北側斜面がいいとも言い、恒温動物では、コウモリやヤマメはあえて体温を落とし、不活発な状態を作り出し移動能力の大きいものでは、冬を暖かい地域に移動することで乗り切るものもあり、渡り鳥はその代表的な例です。

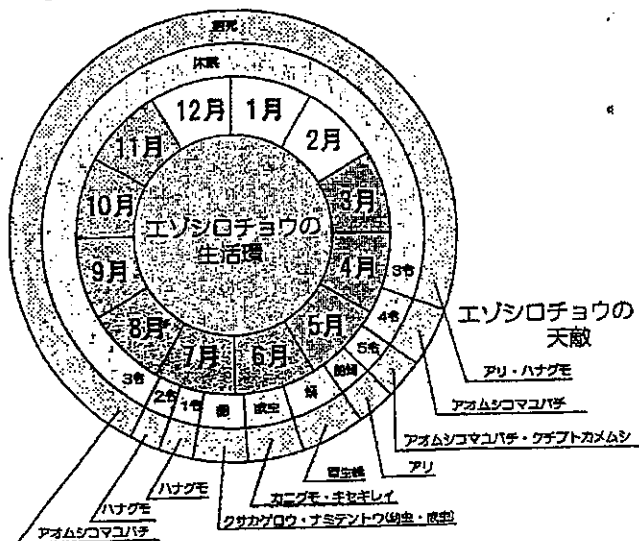
液の中にグリセリンや糖類などの凍害防御物質 (cryoprotectant) が多量にふくまれて、前記 (2) の働きをすること (車の不凍液と同じ?)、また虫体内では細かく分れた大量の脂肪体やその他の多くの組織の間に、血液が極薄い液層となって挟まれているため、水の分子運動が抑えられることなどが考えられます。

このような寒さに対する抵抗性は、夏の最盛期の虫には見られない。その抵抗性の向上は、冬が来る前に起こる環境温度の低下や日長時間の短縮を、昆虫自身が相当長時間順序よく体験することが引き金となって、体内の細胞や組織に変化が起こり、冬の寒さにさらされても生活していけるようにその性質が変わっていったからだと考えられています (体内でのグリセリン等の生産)。この様に温度や日長時間などの体験により、その生物が生活の悪条件に対する耐性を獲得する現象をハードニングと呼んでいます。

この現象を裏付けるものとして、真夏にヒメオオクワガタを宅急便で送るときにクール便を使用し、クール便の冷蔵で依頼して、冷凍で送られてしまっていて凍って死着となった事例があり、これは、ハードニングをする暇も無く急激に冷却され凍死したものであると思われるそうです。実際に寒い中で採集した幼虫は、白く透通っていて、体内の不純物を全て出し切った状態が観察できるそうです。これも氷核形成物質の数量を減らすハードニングと呼ばれるものであるようです。北海道の極寒の環境で、立ち枯れの中心部の温度を測定した例がありますが、気象条件によっては、外気温が $-25^{\circ}\text{C}$ の時でも中心部は $-6^{\circ}\text{C}$ 程度でほとんど一定であったとのこと。クワガタの幼虫が材の中心部に多くいることと関係があるのかわからないのですが、彼らのすみかの温度が $-20^{\circ}\text{C}$ 付近まで下がることはおそろくないのでしょうか。

つぎに、エゾシロチョウは同じシロチョウ科のモンシロチョウとは異なり、越冬巣を作ったり、3令幼虫で冬越しするという特異的な生態を持っています。とくに耐寒性が強く、3令の越冬幼虫は $-19.6^{\circ}\text{C}$ にも耐えられるという驚くべき不思議な生物だそうです。

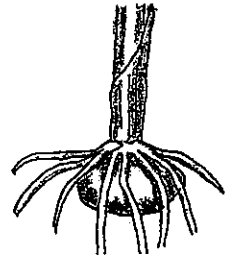
そのエゾシロチョウの1年の生活は次のようです。



## 野幌森林公園に行く

苫小牧市 谷口勇五郎

10月初め、某会の野幌森林公園での植物観察会に出ました。今日は力のある方々が出ていたので何でも聞いていいということでした。大沢口から出発し、Aさんはノブキの果実は腺毛が、ウマノミツバにはかぎ状の刺があり、どちらもひつつき虫という。Bさんはミゾソバの実物を持って来て（ここは採集禁止）茎の下の方や根から閉鎖花が出ているところを見せてくれた。閉鎖花といえば花を開かないで自花受粉するスマレやセンボンヤリを思い出しました。



コウライテンナンシヨウの塊茎

カツラコースを進みながら、Cさんはトチバニンジントチバニンジンの赤い果実を示しながら、チョウセンニンジンと同じ仲間である。トチバニンジンの根はだんご状で、生薬ではチクセツ（竹節）ニンジンといい、解熱・去痰・健胃の効用があるという。この公園では、いつも問題になるのはノッポロガンクビソウのことである。この公園の愛好家はノッポロの名を使いたい。今日はAさん、ノッポロガンクビソウの葉はスペード型で、茎の上の方は枝分かれていますと言う。ミヤマの方は葉の基部にひれがあるものをいう。その日はスペード型の葉を持つものがノッポロということでした。

花の付いたエゾトリカブトがあるところで、Cさんがどこそこのトリカブトが最も強い云々と講釈していた。「アイヌの人たちはトリカブトの毒矢でシカなどを捕ったとき、体に毒が回り、その肉を食べたらどうなるのか」と質問すると「神経毒で毒成分は加水分解されてしまい、毒矢のささった周りの組織は壊死し、その部分を除けば大丈夫」とのことでした。

コウライテンナンシヨウの赤い実を付けたものを、塊茎ごと引き抜いて道端に放置してありました。塊茎は直径5~6cmほどのもので、始めて見ます。茎と塊茎の間から太い根が出ています。Aさんは子供の頃、騙されて、赤い実をかじり、口が腫れたことがあるとっていました。「芋を割ってみたら」と私。誰かがナイフを出し、「水平か、垂直か?」「垂直に頼みます」と私。茎に続く部分が径1.5cmぐらい少し黄色く、外側は白っぽい。白っぽい部分に指を触れ、なめると、5分ぐらい後に少ししびれるような感じがただけでした。その経験者のAさんは「大丈夫か」と声をかけてきました。また、アイヌの人たちは塊茎を熱灰にうめて焼き、黄色い部分（有毒）を除いて食べたそうです。まだ小さいうちは黄色い部分が全体にあるので、食べることは出来ないという。

カツラコースの終わる頃、ツチアケビ（ラン科：葉緑素をもたず、養分をナラタケ菌に依存しているという）がありました。1m程の高さで、褐色の茎と10cmもあるウインナーソーセージ状の果実が幾つかぶら下がっていました。

## オホーツク支部の機関誌 紹介

### 目 次

機関紙【流氷】の発行にあたって

心弾ませ網走へ

『老いに思う』

『今は蛇足の如き我なりき』

「軍艦島」と「鴻之舞」に行つて想うこと

「旅は知識の宝庫なり」

支部長 和泉 勇

春日 順雄

小栗 法韶

佐野 亮二

網走市 法師人 春輝

千葉 亮

＊ ＊ 高齢化していく自分の内心、自然観察、軍艦島をはじめ福岡、山口などに旅行された紀行文、それぞれ内容の濃い味わい深いものです。千葉さんが飛行機から撮ったとってもきれいな「富士山」の写真が掲載されています。

2013年1月発行で、とても遅くなり目次のみの紹介になってしまいました。

昨年5月頃、会長からこの

『流氷』いただいたのですが、6月の発行の機関誌

105号では総会の資料、

10月発行の106号では観

察会の報告文、研究文な

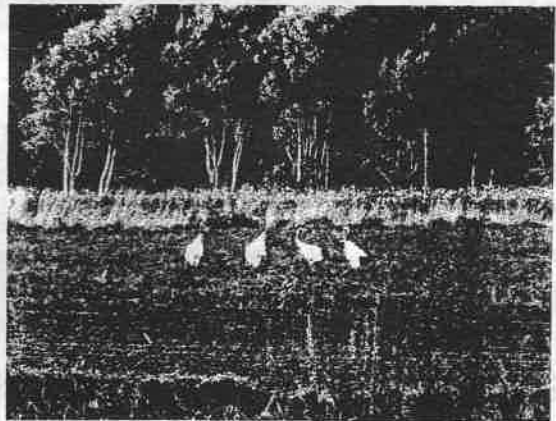
どの原稿が多くて掲載でき

ませんでした。今回、目次

のみの掲載になってすみま

せん。

# 流 氷



北海道ボレティアレンジャー・オホーツク支部

昨年 11月6日～24日 ふれあい交流館で

## 田村さんの見事な力作がそろったバードカービングとスケッチ展

こんなにも多彩な鳥たちが私たちの周りを飛んでいるとは一驚きでもあった

広報部

・前会長の田村さんの、26点にも及ぶくバードカービング>、6枚のくスケッチ画>、そして2点のく木彫>など多様な作品群が展示されていた。それらは鳥たちの生きた姿を活写していて素人をはるかに超えた作品であった。

・コーナーの上の方にはスケッチ画や木彫の作品があり、それに相応するようにバードカービングが並べられていた。くヤマセミ>、くシマフクロウ>、くオナガカモ>、くフクロウ>、くハヤブサ>、くアオサギ>など。空間構成もなかなかうまい。

・木の巣のなかの二羽の子にエサを与えるアカゲラの様子、木の上の二羽のメジロなどもとってもかわいい。

また、くカワセミン>がみごとに魚を捉える様子などもとても生動的であった。

・アオサギの展示コーナーでは、私がまったく見たことないコイサギ、サザコイ、オオシギなどに会えたことはうれしかった。

・私たちのまわりの野原や山林に、こんなにも多様で多彩な鳥たちが餌を求め、子育てをしているとは驚きでもあった。こうした鳥たちの形態、機能、美しさなどをもっと観察していきたい。バードカービングは写真などとは違って立体感があっていい。

・忘年会の席上、田村さんの周りで交流館の方々と話す機会があった。せっかく田村さんが制作の意図や鳥たちの羽などについていろいろと説明してくれたが、そのときは分かっていたようだが、酔っていたこともあってすっかり忘れてしまった。このコメントにも生かすことができれば、もっと厚みのあるものになったであろうに。

### バードカービング&スケッチ展

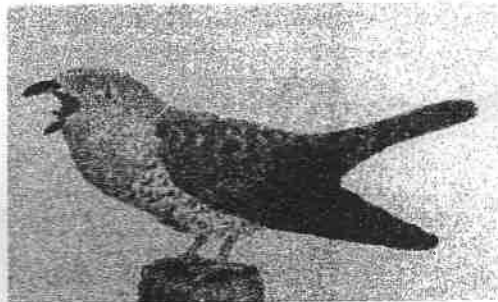
11月6日(水)～11月24日(日)

開館時間 午前9:30～午後4:30

野幌森林公園ふれあい交流館

ふれあいギャラリー

江別市西野幌685-1(大沢口)



Cuckoo by Nobuiku Tamura

問い合わせ

〒007-0811 札幌市東区東苗穂11条2丁目14-18

田村 允 郁

田村さんからの案内のハガキ

周りののみなさんから、私も含め来年（今年）も是非、田村さんにくバードカービング展>をやってほしいという強い要望があった。その際には、宣伝などを工夫しながら、会員はもとより多くの市民のみなさんに見てもらいたい。

・＜独り言＞

この展覧会とは直接的に関係ないことだが、生物の新陳代謝、昆虫の変態などをダーウインがどう論じているか『種の起源』を走り読みしていた。そのことについてはよく分からなかったのだが。

ダーウインは＜自然選択＞説をふまえた最後の結論の所で＜自然の美しさ＞に関してとても深みのあることを記している。

「いろいろな種類の多数の植物によっておおわれ、茂みに鳥は歌い、さまざまな昆虫がひらひらと舞い、湿った土中を蠕虫ははいまわる、そのような雑踏した堤を熟視し、相互にかくも異なり、相互にかくも複雑にもたれあつた、これらの精妙につくられた生物たちが、すべてわれわれの周囲で作用しつつある法則によって生みだされたものであることを熟考するのは興味ふかい。——

生命がそのあまたの力とともに、最初はわずかのものあるいは一個のものに、吹きこまれたとするこの見かた、そしてこの惑星が確固たる重力法則に従って回転するあいだに、かくも単純な発端からきわめて美しいきわめて驚嘆すべき無限の形態が生じつつあるというこの見かたのなかには壮大なものがある。」 (S)

\*\*\*余白に 高村光太郎の詩 <蝉を彫る>

芸術家の製作における高揚感が伝わってくる詩。

冬日さす雨の窓に坐して蝉を彫る。  
およそ生きの身のいやしさを絶ち、  
蝉は天平机の一角に這（は）う。  
もろく薄く透明な天のかけら、  
ゆやかなになだれて迫らず、  
わたくしの刻む檜（ひのき）の肌から  
時処をわすれ時代をわすれ  
この四疊半と呼びなす仕事場が

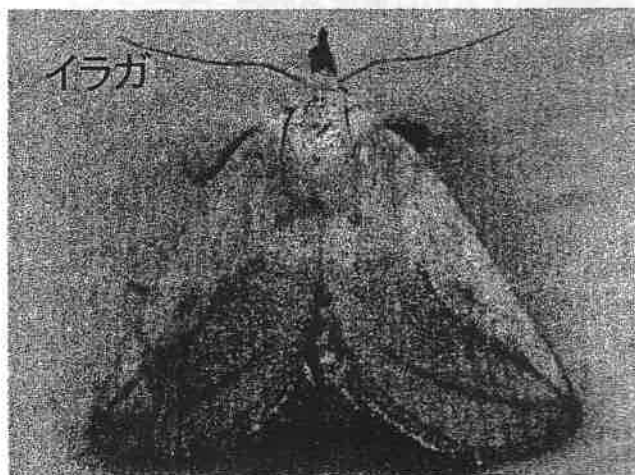
乾いて枯れて手に軽いみんみん蝉は  
物をくう口すらその所在を知らない。  
わたくしは羽を見る。  
この昆虫の持つ霊気の翼は  
黒と緑に装う甲冑をほのかに包む。  
木の香たかく立って部屋に満ちる。  
人をわすれ呼吸をわすれる。  
天の何処かに浮いているようだ。



# 自然観察NOW

野幌森林公園自然情報  
平成25年度 No.7  
平成25年11月10日発行

北海道ボランティア・レンジャー協議会



これはイラガの繭です。イラガは口(吐糸口)から糸(絹糸)を吐いて、まずカラダの前半分が入る粗い目の網を作ります。その後、カラダを反転して後ろ半分が入る網を作り、カラダ全体を網に納めます。網の目が粗いので幼虫の刺毛は繭の外に飛び出していますが、その刺毛の生えている角(肉角)は網の中に納まっています。繭の中で幼虫は少しずつ動きながら絹糸を出して網目を細かくしていきます。繭の中の幼虫は肛門から、白いドロドロした液を何度かに分けて出します。そして、口(吐糸口)ではなく食べ物を食べる口)からは薄い褐色のドロリとした液を吐き出します。幼虫は繭の中で前に進んだり、止まったりしながら、この白いドロドロした液と薄い褐色の液を繭の中から編み目に押しつけます。頭と胸と腹で押して、繭の形を整えながら網目に塗り込むのです。実は、模様は、幼虫が繭の中で動いた時に出来るものです。繭の外側は白いドロドロした液が塗られた層(網目からはみ出しています)そして一番内側は絹糸で作られた層、その中間は白いドロドロした液と褐色の液が混ざり合った層なのです。カラダや肉角が繭に触れているところは褐色の液で塗られていきます。また、肉角などの出っ張りで隙間が出来るところには、白いドロドロの液が流れ込み、白い模様が出来上がる仕組みになっています。要するに褐色の部分は繭と幼虫が接した部分、白い部分は塗り残しということでしょう。よく見てみると確かに褐色の部分は肉角で擦ったようなラインです。

広い褐色の部分は腹が当たっていたところですね。イラガの繭の様子はそれぞれ違いますね！それは、白や褐色の液を出す際に、イラガの体勢は個々で異なり、それによって液の流れ方が違うためなのです。完全に硬くなるのには数日かかるようですが、数時間でかなり硬くなりました。イラガの繭は縦(長軸方向)では7.7kg、横(短軸方向)では6.4kgまで耐えられるそうです。イラガの繭の硬さの秘密は、回転楕円体であり、繭層が厚く、しかも何層にもなっています。そして、絹糸の網目にキッチリと詰まった褐色の液に含まれるタンパク質が硬い層を作り出すのです。では、白いドロドロした液は何でしょう？白いドロドロした液はシュウ酸カルシウムと尿酸であり、これは水に溶けにくい物質です。しかし、繭の硬さには直接には関係なく、おそらく、褐色の液のタンパク質を網目から漏らさないためのものだと考えられています。

イラガは三段がまえの越冬戦略をもっています。まず、丈夫な繭の殻は、前蛹を低温から守る防寒具です。次に「過冷却」の状態では休眠します。これは、凍るはずの温度でも凍りださない現象です。体のためにこんだ不凍液のために、マイナス20度に100日間さらされても、春になれば変態を再開して蛹になり成虫が羽化します。さらに三番目の戦略は、「細胞外凍結」です。マイナス20度以下では、それまでの過冷却を保ってなくなって体内に氷ができます。しかし、細胞の隙間を満たしている体液は凍っても、細胞の中までは凍りません。細胞は凍結せず厳冬期を生き抜いていけるわけです。イラガが北海道の北部からシベリアにまで分布を広げているのは、驚くべき越冬戦略の持ち主だからでしょう。

朝比奈英三氏によると、昆虫は、種によって卵、蛹、幼虫、成虫の姿で越冬します。越冬する環境は、木の枝の卵や繭の中、樹皮の隙間、落ち葉の中、地中、木の枝、草の茎の中など、種によって異なり、氷点下でも昆虫の体が凍らないのは、越冬するそれぞれの環境の樹皮や落ち葉、土が保温材となって昆虫の凍結を防いでいると考えられています。これらの環境の中で最も一定の温度が保たれるのは地中で、外気温の影響を最も受けやすいのは、枝上の卵や繭であると考えられます。しかし、観察地域でも2月初旬には気温は氷点下になり、高山や寒冷地域の気温はさらに低く、 $-10^{\circ}\text{C}$ 以下になることも珍しくない。昆虫の卵や繭には、それでも昆虫の体が凍らないほどの保温効果があるのでしょうか？成虫で越冬するチョウやハチは、 $-20^{\circ}\text{C}$ くらいまで凍らない過冷却という現象を利用して越冬しています。しかし、体が水に触れると $-20^{\circ}\text{C}$ 以上でも凍結し、死んでしまうという。昆虫の卵の殻や繭には昆虫の体と水との接触を防ぎ、昆虫の体を凍結から防護する効果があるようです。

イラガと同じように、昆虫の中にはグリセリンなどの物質を作り出すことで越冬に耐える耐凍性を持つ種もいるのです。蛹で越冬するキアゲハは、過冷却温度 $-23.5 \pm 2.2$ 、耐凍度 $-30^{\circ}\text{C}$ の防寒能力を有するのです。全く動けないわけではなかった。朝比奈によると、昆虫は休眠して越冬するのですが、休眠とは変態のいずれかの段階でその成長の課程を一時停止するだけで、必ずしも動かないというわけではなく、幼虫や成虫は歩いたり、飛ぶこともできるので、冬に先立ち休眠することで、「晩秋などにかなり暖かい日が続いても、餌のない時期に卵から幼虫がかえったり、チョウが羽化したりして死の危険にさらされることを巧みに防いでいる」とのこと。このような能力を「昆虫は長い進化の過程で、そのすみ場所の環境条件に適合して獲得した、生き残るための戦略のひとつだそうです。

たまごで

カマキリ、バッタ、コオロギ、トンボの一部(アカトンボの仲間など)

幼虫で

ノトムシやコガネムシの仲間、セミの仲間、トンボの一部(ヤンマの仲間など)

さなぎで

モンシロチョウ、アゲハ、イラガなど

成虫で

テントウムシ、スズメバチ、アリなど

### 植物の場合

植物は、弱い部分を枯死させることで冬を生き抜きます。たとえば木本では葉を切り捨てるものが多く、これを落葉といい、次の年に成長する新芽は厚い鱗片などで被われた冬芽となります。草本ではこのほかに、地上部を枯死させ、地下茎や球根で生き延びるものや、種子のみが生き延びるものもあり、一部を捨てることをしない植物は常緑性といいます。冬のある地域で常緑性のものは、より温暖な地域のものに比べ、背が低く、葉が硬くて厚いなどの特徴を持ち、また、寒さに対して細胞内の糖分濃度を高めるものがあることも知られています。細胞内が氷結しにくくなるための適応と考えられています。

# 自然観察 Now

野幌森林公園自然情報

平成25年度 No. 9

平成25年3月24日発行

北海道ボランティア・レンジャー協議会

今年は大雪と厳しい寒さでたいへんな日々でした、でも春がそこまで来て

## 《今年の冬を振り返りながら》

今年は何年にもなく大雪（札幌などは1981年来の豪雪）、寒さ、暴風雪などで厳しい生活が続き、やっと思差しが強くなって来ました。それでも雪溶けは遅く、残雪も多いです。

2月17日（日）の「森の観察会」、その前日の16日の下見会を開いた時には、いつもの年より雪がやや多かったようです。でも、キタコブシの冬芽が多くあって、今春はこのコブシの花々が咲き、この公園は多彩で豊かなものにしてくれるので、楽しみであると話していました。— 去年はキタコブシの花が少なく淋しい春でした。—

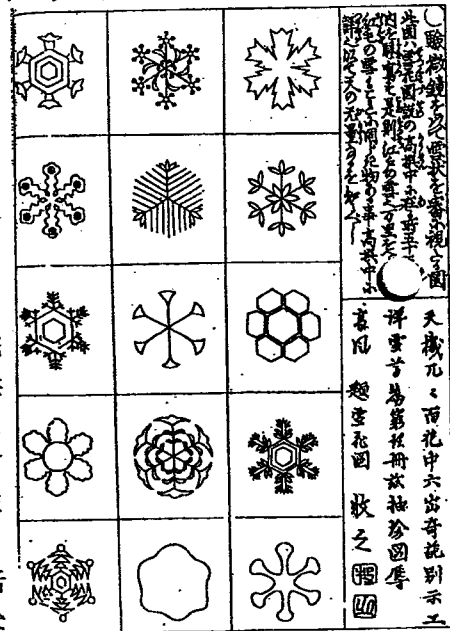
その後、2月下旬から3月上旬にかけ、連日のように大雪、暴風雪などが続き、たいへんな日々で悲しい事故がありました。

今回の観察会のテーマは「森の中で春をさがそう」で、本来であればこのテーマに即した内容の文を書くのが当然なのですが、今回も雪を中心に人々の生活、文化にかかわることを書いてみたい。

簡単にその理由を述べてみます。私たちの協議会では、観察会の前日に下見会を開き、そこで研修会を行い、今回は「雪と生活、文化」に関する学習でした。そこでのレポーターがこの「NOW」の原稿を書くことになっています。そうしたこともあって2月の初め、北大の博物館で「中谷宇吉郎展」を見学に行ってきました。そこには雪の結晶、雪華をうまく取り入れた着物、ネクタイ、ハンカチ、コップ、陶器などがあって写実的な美しさがあった。人々は雪を上手に生活に利用して生活・文化を潤いのあるものにしていくことに感心しました。

もう一つは3月2～3日にかけて道東を中心に猛烈な吹雪に見舞われ悲しい事故があった。中標津では、母子3人の車が動かなくなり死亡し、湧別町では父親が子供を児童センターに迎えに行き、帰宅の途中、歩いて道を探し牧場の倉庫の前で自分のジャンパーを子供にかけ凍死してした。小3の女の子は軽傷で生存していた。そのようなこともあって雪を生活と文化との関わりで、その防災を含めて考えてみなければならないと思って、この「NOW」を書いてみました。

一般的に言えば、現代の私たちがこの雪のなかでどのような生活をし、文化をつくっているのか記すべきですが、今回は時代をかなり飛び越えて江戸時代に書かれ、今日まで読まれている鈴木牧之さんの名著『北越雪譜』を紹介してみたい。学ぶことが多くあるようです。



《江戸時代の1837年発行、名著 鈴木牧之『北越雪譜』にふれて》

この著には、江戸時代（天保）の北越（新潟県 南魚沼を中心）での人たちがどのように雪と関わって

生活をし、文化をきづいてきたのか、悲しいエピソードを含めて興味あることが多く書かれています。

著者鈴木牧之さんは若いとき商人として華やかな江戸に出て滝沢馬琴など多くの文人と出会い、その後地元で質屋などをし、その間、俳句、絵画などを学び比較的恵まれた生活をしていたと思われます。この著作は1937年に出版されたが、それまでに30年もかかったようです。そうした経緯からして、約200年前の著書といえます。雪の形状(かたち)、推量(たかさ)、生態、風俗など豪雪地帯での風物、生活が描かれています。そこでいくつかを紹介してみたい。

まず、初めに雪の細やかな分類に始まり、それを循環的に書いています。それも人間の呼吸との関わりで、天地の呼吸とされている考え方はすばらしいです。人間も自然との直接的な関わりは呼吸をとおうしです。

最初にく「地気」(ちき)が雪となること>というテーマで。

「天から降ってくるものに雨、霰(あられ)、霰(みぞれ)、雹(ひょう)がある。露は「地気」が粒になったもの、霜はそれが凝固したもの、冷気の強弱によって形がちがう。地気は天にのぼると雨や雪や霰や霰や雹になるが、「温気」を受けると水になる。水は地をつくっているの、つまるどころ、元のところに戻るわけだ。地中の深いところはかならず「温気」がある。地はあたたまると気を吐くもので、それが上にのぼっていく。人の呼吸と同じで、片ときも休むことができない。天もまた気を吐いて地にくだす。天地の呼吸であって、人が息を吸ったり吐いたりするのと同じように、天地が呼吸して万物育つ。」

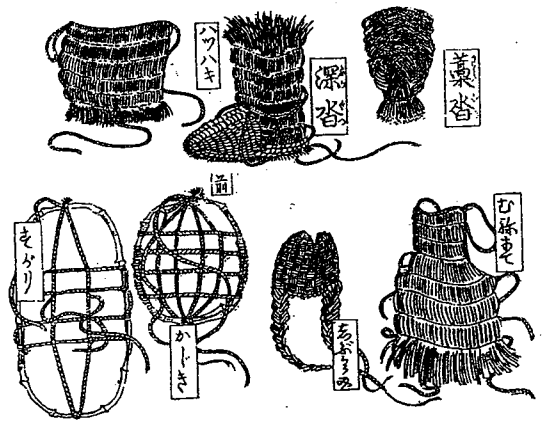
二つ目として、<吹雪>というテーマで、悲しみ満ちた雪の事故を記しています。

若い夫婦が赤ん坊を連れて、お嫁さんの実家に孫を見せに行く途中、天気は良かったが急変して猛烈な吹雪にあつて体は凍え、雪に埋もれた。助けを求めたが人はいなく、夫婦とも倒れ死んでしまう。翌日、天気が回復し、村の人が通りかかって雪のなかに赤子の泣き声がするので雪を掘る。夫婦は手を握って死んでいた。生存していた赤ん坊を懐に入れ、死骸は藁に包み家へ背負っていった。

今冬の道東での事故を想いだされるようでつらい気持ちになってしまう。

その他にも、サケの養殖に関する発想、クマに助けられた話、芭蕉の俳句のことがあったりして興味あることがあるが、省略したい。

江戸時代にあつた悲しい暴風雪の事故であるが、今日のように科学・技術が発達した時代にも同じような悲慘な事故が起きてしまった。雪は一面では、生活に役立つと共に恐ろしい災難を引き起こすので、その防災などの対策をつくっていくことが重要な課題であろう。先日のNHKのテレビであつたが、大雪のなかで地震、津波に襲われてときの防災対策などの準備が必要になってきているようです。



&挿画は鈴木牧之さんの「北越雪譜」から

## 今年度も「自然ふれあい交流館」との共催で、多くの自然観察会を実施しようと計画しています。できればまた参加してください。



～ 事務局便り ～



<お願い>

① 今年（2014年）はボラレン役員改選の年です。ボラレンの役員として会の運営に携わって頂ける方を募集しています。ぜひ会員皆様の知力、体力をボラレンの運営に役立てただけませんか。もちろん財力の溢れている方も大歓迎です。（ご寄付）

ご協力いただける方は会長春日順雄さん（011-881-4090）へご連絡をお願いします。☺

② 各地で新年度の行事予定が計画されていることと思います。

ボラレンと直接関係のないものでも会員に情報としてお知らせしたいです。以外な植物の生育地、花の開花情報や鳥の情報、自然情報も有難いと思います

お知らせは事務局長室野文男さん メール [fum-murono@hokkaidou.me](mailto:fum-murono@hokkaidou.me)

<お知らせ>

① 今年度の自然ふれあい交流館と共催の観察会は2回のみとなりました。その下見時において講師の方に話題を提供していただきベテラン、初心者、ともに研鑽を積んでいきたいです。講師とテーマは以下の通りです。☺

2月15日（土） 10時～ 自然ふれあい交流館集合  
新谷良一さん 「かつての野幌原始林」

3月22日（土） 10時～ 自然ふれあい交流館集合  
熊野美子さん 「冬芽」

## 編集後記

- ・表紙のカットはクローズ千鶴子さんが描いてくれました。
- ・<写真特集>は春日会長の撮った写真なども入れながら、研修の様子を松井玲子さんがとってうまく制作してくれました。
- ・新しい年に向かって新たなる活動を展開していきたい。新メニューならぬ独自の企画も検討しています。3月発行の機関誌でお知らせします。さまざまな研修会に参加され自分を磨いて行って下さい。それらが大きな活動の力になります。
- ・今年度は2年に一回の役員の変更です。多くの方々が役員をされ、会の活性化につなげてほしい。<事務局便り>にも記されていますが、自薦、他薦で会長の春日さんまで連絡ください。
- ・NOW発行。NO6号は小林さん、昨年度の9号は佐藤が担当。  
なお、前号に掲載した6号は五十嵐さん、7号は土屋さんが書いてくれました。
- ・獣医師で富良野在住の南部栄一さんから年賀状をいただき、その中に赤岳で撮影された<アサヒヒョウモン>、<ウスバキチョウ>の写真が載っていました。後者などはとってもきれいです。私も何回か赤岳に登ったが一度も見ることができませんでした。南部さんに、このチョウたちの生態などに関して写真入りで執筆をお願いしたいと考えています。
- ・前号に、佐藤の書いた原稿に間違いがありました。訂正させていただきます。  
一つは最初の所で、宮沢賢治の詩「生徒諸君に寄せる」の「…人と地球にとるべき形を…」と引用しましたが、正しくは「よるべき」でした。ニュアンスが異なってくるようですが。もう一つは、道北研修の旅にふれ、火砕流が流出して層雲峡の柱状節理が形成された年代を約3億年前と記しましたが、正しくは約3万年(1~3万)前です。いくらスケールの大きな地質年代とはいえ、間違っていました。なお、後者は道北研修で講師を務めてくれた中谷良弘さんから手紙で指摘を受けました。ありがとうございました。
- ・次号108号は3月下旬を予定しています。3月15日まで広報部、北広島の佐藤まで原稿をお願いします。

『エソマツ』 2014/01/28 発行

冬季号 107号

会長 春日 順雄